第３話　離島に台風が来ると大騒ぎ【中編】

ジョージ・スギーニー
GEORGE SUGEENEY

台風の当たり年

〝皆様にご案内致します。この飛行機は、凡そ15分後に那覇空港へ向け最終着陸態勢に入ります。お化粧室などをご利用のお客様は、どうぞお早めにお済ませ下さい〟（機内アナウンス）

「オヤジ、トイレは大丈夫？」
「お前はさっきからトイレトイレって煩いな」
「行きたくないならいいけど、あと５０分近くは行けなくなるから」
「なんでそんなに行けんくなるだ」
「１５分後に最終着陸態勢に入って、その後着陸するまで約１５分。着陸して空港のトイレへ移動するのに約１０分。多分トイレが混んでるから更に１０分並ぶ事になってトータル５０分」
「一応行っとくか」
行くんかい。
なかなか一筋縄ではいかない親だ。

そして１５分後、シートベルト着用のランプが点いた。

〝皆様にご案内致します。只今シートベルト着用のサインが点灯致しました。この飛行機は、凡そ１５分で那覇空港に着陸致します。お座席の背もたれを元の位置に戻し・・・〟（機内アナウンス）

〝カチャ　カチャ　カチャ〟

「あれ、この背もたれ元に戻らんぞ」
「そんな事ないでしょ、レバーを引いて・・・、背もたれにもたれてたら戻るわけないでしょ。体を起こして、そうそう、それでレバー引くの」
「おお、こうか」
なかなか世話が焼けるのである。

〝ウィーン、ガー、ガタ、ゴト〟

車輪を出す音が聞こえた。
座席が車輪の上あたりだと、僅かに振動も足に伝わってくる。
音が聞こえなければ車輪の事は特別気に留めていないが、聞こえてくるとちゃんと出てるのか逆に気になるものだ。

そして飛行機は旋回をして、滑走路に向けて直進に入った。

〝ドン ボーーーー　ゴロゴロゴロゴロ〟(着陸の音)

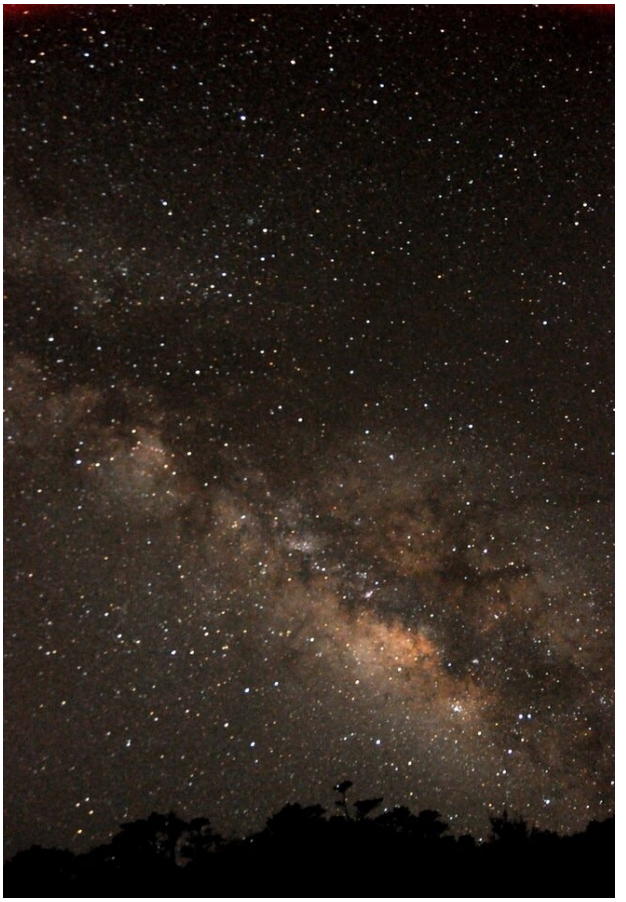
〝皆様、只今沖縄 那覇空港に到着致しました。これより２６番スポットまで移動致します。シートベルト着用サインが消えるまで、お席でお待ち下さい。那覇の天候は晴れ、気温は摂氏３１度・・・・〟

飛行機は無事に那覇空港へ着陸した。
那覇の空はとても広かった。
抜けるような青空に、綿菓子の様な丸い雲が、低い位置にポツン ポツンと浮かんでゆっくりと流れている。
私はこの青空を見る度に、脈拍が少し上がる。
脈拍が上がるということは、毎日見ていれば運動不足も解消されるのでは？と思ってしまう。

それに比べ東京の空は狭い。
高い建物が多いからというよりも、家が密集しているからだろう。
近所を散歩中に空を見上げても、視界の半分ぐらいしか空が見えない。
夜は夜で星は数えるほどしか無い。
東京と言っても檜原村の様に自然豊かな東京もあるので、一括りに〝東京は空が無い〟とは言えないが、少なくとも私の住んでいる新宿区には無い。
なので空に興味は無いのだが、沖縄は別だ。
沖縄の空はいろんな事が起きる。
よく晴れた暑い日は、スコールが移動しているのを見かけたりする。
雲の下から局地的にシャワーを浴びせながら移動している。
凄い時はシャワーじゃなく、洗車用のジェット噴射の時もある。
これがジェット噴射だ。

あの局地的に凄い雨の中がどうしても気になる。

そして夜は満点の星空。
真っ黒な紙に沖縄の海の砂をばら撒いたような星空だ。



こうなるとカシオペア座を見つけるのも簡単ではない。(カシオペア座＝Wの形)
星と星を線で結んで星座を探していると、流れ星が落ちる。
今度は流れ星を探し始めると、ゆっくりと移動する光の物体を見つける。
飛行機なら点滅しているが、それは一等星ぐらいの光を放ち点滅はしていない。
初めて見た時は、「UFOだ」と叫んでしまい周りの人達が「どこ？どこどこ？」と言って驚かせてしまったが、それは人工衛星だ。

そしてたった一度だけ凄い物を見た事がある。
忘れもしない、それは私の誕生日だった。
阿嘉島のビーチバーで飲んでいる時、深夜０時になった瞬間にそこで飲んでいた人達が一斉に「♪ハッピーバースデートゥーユー」と歌って祝ってくれた。
その日が誕生日だという事を忘れていたので素直に嬉しかった。
そして凄い物を見たというのは、その歌の１５分ぐらい後だった。
南の空を見ていたら、突然一点が〝ピカッ〟と光り、緑色の光を放った玉が〝ボー〟っと音を立てて落ちていった。
それは眩しい程の光だった。
夜空とは、本当は黒い幕で覆われていて、その向こう側には太陽があって、その幕を切り開いたら光が漏れた、そう思わせるぐらい明るく正に夜空を切り裂く光だった。

光った方角には久米島があるので、一瞬久米島で上げた花火かとも思ったが、少し位置がズレている。
それに５０ｋｍ以上離れた久米島で上げた花火にしては位置が高過ぎる。
時間も深夜０時を回っている事を考えると、花火の可能性は極めて低い。
それはおそらく隕石だった。
一緒に見た人達もみんな感動していた。
沖縄の空はいろんなショウを見せてくれる大スクリーンなのだ。

そしてその素晴らしい夜空は、本島よりも離島の方がより素晴らしい。
毎年阿嘉島へ行っているのも、それが目的の一つでもある。

我々は阿嘉島へ向かうべく、タクシーで泊港へ向かった。
そう言えば朝から何も食べていない。
阿嘉島へ渡る前に腹ごしらえをしてから行く事にしよう。
行き先を国際通りへ変え、沖縄へ来ると必ず立ち寄る沖縄そば屋、〝田舎そば〟へ向かった。
私の知る限りではソーキそばが那覇で一番安いお店で、１杯３５０円だ。（2004年現在）
沖縄そばではなくソーキそばが３５０円だ。
よく沖縄そばの事をソーキそばだと思っている人がいるが、これは別の代物だ。
沖縄そばは入っている肉が三枚肉で、ソーキそばは骨付の肉が入っている。
更に細かく言うと、ソーキは２種類あって〝軟骨ソーキ〟と〝本ソーキ〟がある。
〝軟骨ソーキ〟は、その名の通り軟骨だから骨まで全て食べられる。
一方〝本ソーキ〟は、硬い骨が付いているから骨は食べられない。
私はどちらも好きだが、ここのお店で出されているのは軟骨ソーキだ。
そして麺は宮古の麺。
沖縄そばと言っても麺の種類がいろいろあって、宮古の麺は平べったくて縮れていない。
本土の方で沖縄そばというと縮れた麺を想像する人が多いと思うが、宮古や八重山の麺はストレート麺。
私はストレート麺の方が好きだ。

ソーキそばでお腹を満たして、昼過ぎの高速船で阿嘉島へ向かった。

今日は波が比較的穏やかなので船も揺れが少ない。
これなら小湊も安心だろう。
泊港を出て３０分位した頃だろうか。
甲板で船の斜め後ろの海を見ていると、何かが海面を〝ビューッ〟と飛んでいくのが見えた。
「何だ？今のは」
私がそう言うと隣に居た小湊が、
「何か居ました？見てませんでした」
こういう時、たいてい見逃しているのが小湊だ。

「何かが３０ｍ位飛んでったぞ」
「鳥じゃないですか？」
「その辺に鳥なんか居ないだろ」
するとまた何匹か飛んでいった。
「見たか？今の」
「えっ、波しぶきに見えた虹ですか？」
「そんな事でこんなに騒ぐかっ、俺は小学生か。海面を何かが飛んでっただろ」
「いやあ、見てなかったです」
コイツはサッカーのワールドカップで日本のゴールシーンを見逃すタイプだ。

今確かに４～５匹の魚が３０ｍ位〝ビューッ〟っと飛んでいった。
どうしても気になり近くの人に聞いたら、それは〝飛魚〟だった。
私の飛魚のイメージは、ピョンピョンと海面を飛ぶイメージだったが、実はそうではなかった。
何十mも飛んでいくのだ。
まるで必死に逃げるバッタの様だった。
普段バッタはピョンピョンと跳ねているが、本気を出した時は〝ビューッ〟と飛んでいく。
それに似ていた。
飛魚のヒレは他の魚に比べれば確かに長いが、長いと言ってもあの程度の長さでそんなに飛べる
という事は、ヒレの付け根の筋肉はハンパないという事だ。
今まで飛魚の事を少々見くびっていたようだ。
おちゃらけた呑気な魚だと思っていたが、まさかのアスリート系だった。

そんな飛魚の身体能力に感動していると、船がスピードを落とした。
前方を見ると、いつの間にか阿嘉島の港へ入港しようとしていた。

甲板から阿嘉島のフェリー乗り場を見ると、お出迎えの人が１０人程居る。
少しずつではあるが観光客が増えてきている証拠だ。
そのお出迎えの中に知人の姿を見つけた。
彼は阿嘉島のビーチバーでバーテンダーをやっている谷本 尊(タニモト タケル)、通称タケちゃ
んだ。
先月ここへ来た時、私に〝ジョーさん、台風を呼んでますね〟と言っていたのは彼だ。
船を降りると、向こうも私を見つけ近寄ってきた。
「ジョーさん、今回は台風呼ばなかったですね」
「良かったよ。今年は毎回台風に邪魔されてたからね。後でバーに顔出すよ」
そう言って我々は今日から３日間お世話になる宿〝辰登城〟へ向かった。
歩いている途中、いつの間にか無口になっている小湊を見た。
「小湊・・・、あれ？・・・お前顔が青いぞ？」
「いやあ、ちょっと船に酔いました」
「今日はそんなに揺れてなかっただろ」
「う～ん、船の斜め後ろの海を見ていたら気持ち悪くなってきました 」
それは私への遠回しのクレームだった。

何かにつけて弱さが売りの小湊だが、彼は広島出身だ。
広島出身なのに牡蠣が苦手だという勿体ない男だ。
しかもそれが分かったのがつい半年前。
二人で恵比寿のオイスターバーに行って発覚したのだ。
その時最初に注文したのは、広島、宮城、アメリカなどいろいろな産地で採れた生牡蠣だった。
それを一つ食べて、
「すみません、自分牡蠣が食べられないかもしれません。なんか気持ち悪くなってきました」
と言う。
「お前広島出身だろ？あっちに居たら他県の人より食べる機会はあるだろ。何で今まで気付か
なかった」
「いやあ、前々からもしかして？と思ってたんですが、今確信しました。ちょっと無理です」
彼は既に三十路を過ぎている。
社会人になってから１０年は経過しているのに、今食べられない事が分かったという事に驚かさ
れる。
これがフォアグラやトリュフなら食べる機会が少ないから分からなくもないが、相手は牡蠣だ。
普通にスーパーで手に入る食材だ。
すると店員さんが追加注文を聞きに来た。
「次は何をお持ちしましょう」
 そう聞かれると小湊は、
 「すみません、牡蠣がちょっと苦手なんで牡蠣以外の物はないですか？」
とてもオイスターバーで聞く会話ではない。
お店の人も〝この人は何しにオイスターバーへ来たんだ〟という顔をしていた。
そんな事が半年前にあったのだ。
今回の旅行でも面白いネタを期待しています。

港から歩くこと５分、宿に到着すると２０歳代前半のお姉さんが出迎えてくれたのだが、キョト
ンとした目で私を見ている。
「あれ？ジョーさん、今うちのスタッフが港まで迎えに行きましたよ？」
「うそ、今回送迎お願いしてたっけ？あ、親父の足が悪いからお願いしてたんだ。ちょっと港ま
で行ってくる」
「あ、大丈夫です。携帯に連絡するんで」
親父が想像以上にスタスタ歩いているから完全に忘れていた。
それにしても親父の回復力は凄い。
とても去年脳梗塞をした人間とは思えない。
当初は軽い言語障害と右手右足が麻痺していたが、今では殆んど無くなっている。
大好きだった釣りを昨年末からまた始め、最近ではゴルフも再開したらしい。
ゴルフと言ってもショートコースだが、１８ホールをカートではなく歩いて回っている。
好奇心が強いという事は生命力が強いという事なのかもしれない。

我々は宿に荷物を置き、早速ビーチバーへ向かった。
勾配の急な登り坂を歩いていき、〝ちょっと休憩したいなあ〟と思う辺りに〝←ビーチバー〟の
看板がある。
矢印の指す方へ進むと今度は急激な下り坂だ。
体を後ろに傾けてブレーキを掛けながら下りていく。
道幅９０cm位の細道で、両サイドは草木が鬱蒼と生い茂っている。
道はコンクリートで舗装されているが途中から砂地に変わり、この辺りから波の音が聞こえて
くる。
身の丈を超える草の中、クモの巣を避けながら更に進むと、やがて視界が開け、小さなビーチが
現れる。
ビーチの片隅には、小ぢんまりとしたバーカウンターがある。
５人位しか座れない小さなカウンターで、そこがタケちゃんの仕事場だ。
そのバーカウンターは、毎年島に流れ着いた流木を掻き集めてきて、それをタケちゃんが組み立
てて作っている。
何とも味のあるバーだ。
それもシーズンが終わると燃やしてしまう。
僅か３ヶ月足らずの儚い命だが、それがまた良い。

初めてビーチバーを見る親父は、まるでドラマに出てくるバーみたいだと上機嫌だ。
流木でできたカウンターの椅子に巨漢の親父が座る時、壊れるんじゃないかと少し心配したが、
流木は案外丈夫だった。
カウンターに着くとタケちゃんが、
「ジョーさん、おめでとうございます」
と言ってきた。
「ん？なにが？」
「さすが台風を呼ぶ男ですね」
「いや今回は呼んでないけど」
「先程フィリピン沖で台風１５号が発生しました」
「えー、ホントに？」
「さっきフェリー乗り場へ行った時にダイビングショップのスタッフが言ってました」
ダイビングショップの情報ならまず間違いないだろう。
「いつ帰るんでしたっけ？」
「明後日」
「う～ん、調度来る頃かもしれませんねえ」

正に青天の霹靂だ。
親父は「別にいいじゃん、来たって」と、やはり呑気に何も考えていない。
ここで足止めを食らって本島へ帰れなくなると、滞在期間が延びて仕事に影響が出てしまう。
明後日高速船で本島へ戻る予定だが、台風が近付くと波が高くなるので高速船はすぐに欠航になってしまう。
まだ遠くにいるからと安心はできない。
海は繋がっているのでわりと影響を受けるのだ。
もし高速船が欠航になると、人が一気にフェリーへ集中する。
台風の進路や速度によっては２～３日足止めをくらう事もある。
これはノンビリとしてる場合じゃない。
急いで切符を変更しないと。
ビールを一気に呑んだ。

私：「よし明日帰ろう」
小湊：「え？明日ですか？さっき来たばっかじゃないですか」
私：「バカ、島から出られなくなるぞ。本島に居れば台風が来ても観光できる所はあるけど、ここに居たらやる事が無くて酒浸りになるぞ」
小湊：「え～、大丈夫ですよ。だって風とかまだ全然無いし快晴じゃないですかあ」
私：「お前は状況が把握できてないんだよ。後でゆっくり説明してやるから。とりあえず船の切符を変更する」
小湊：「大丈夫だってば～」
タケちゃん：「小湊さん、明日帰った方がいいですよ」
小湊：「ホントですかあ？」
私：「オヤジ、船の切符変更してくるからここで呑んでて」
親父：「分かった」
と言って左手を軽く上げる親父の横に、「気を付けて」と右手を上げいてる小湊が居る。
私：「バカヤロウ、お前も行くんだよ」
小湊：「あれ？そうなんですか」
私：「当たり前だろ、走るぞ」
小湊：「え～、走んなくても・・・」
いちいち愚痴が多い奴だ。
おそらく台風発生を知っている人はまだ少ない筈だ。
切符売場に殺到する前に行かねば。

勾配が急な上り坂を一気に駆け上がり、フェリー乗り場を目指した。
そして切符売場が見えてきた。
中の様子はまだ伺えないが、外に人だかりは無い。
少しホッとした。
中が人だかりの山だったらどうしよう。
ドキドキしながら中を覗くと、意外にも女性が一人居ただけだった。
すると小湊が自慢げに、
「だから言ったじゃないですか。焦る必要無かったのに～」
女性の手を見ると８人分の切符を持っていた。
予定していた便を早めたそうだ。
やはり予想は強ち外れていない。

「すみません、明後日の高速船を明日のフェリーに変更したいんですけど」
「明日のフェリー？ちょっと待ってよ、まだ有るかなあ。何名？」
「３名です（お願い、空いてますように）」
「３名か・・・、３名なら大丈夫」
良かった間に合った。
するとまた煩い小湊が
「ほらあ、全然大丈夫じゃないですか」
そう言うと切符売場の人が

「いやお客さん、もうあと数席しか無いから危なかったよ。座間味島の方でもドンドン埋まってるしね」
そうだ、座間味島からも乗ってくるんだ。
それにあっちの方が圧倒的に人数が多い。
危ないとこだった。

「因みに高速船はまだ空きはあります？」
「いや高速船はもう満席だからキャンセル待ちするしかないね。だけど明日の高速船は欠航になるかもしれないよ」
ヨシ、やはり睨んだ通りだ。
みんなは早く帰ろうとして高速船を選んだようだが、フェリーに比べて欠航になり易い。
ここはフェリーを選んで正解だろう。
これで後はノンビリと本島での予定を考えればいい。
ビーチバーへ戻って考えよう。
切符売場を出ようとした時、４人組と３人組のグループが切符の変更をしたいと入ってきた。
しかしフェリーはもう満席になったようだ。
走ってきて正解だった。

実は、明日は更に波乱の一日となるのだが、そんな事になるとは露知らず、ビーチバーで本島でのプランを考える３人であった。
そしてその本島のプランは、実行されることはない。

沖縄は海と空で出来ている　【第３話】離島で台風が来ると大騒ぎ《中編》

http://p.booklog.jp/book/100718

著者：ジョージ・スギーニー
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/jeorge5/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/100718

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/100718

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ